

南北戦争の時代

年表	
年代	重要な出来事
1861.4.12	フォートサムターへの砲撃によってアメリカの南北戦争が始まる
1861.4.9	「教会の幌馬車隊」による移住の試みが成功する
1861.10	大陸横断の電信線がユタで全面開通する
1862.4	モルモンの民兵が大陸横断鉄道の守備のために合衆国陸軍に応召する
1862.6	モリス派事件が起きる
1862.10	バトリック・エドワード・コナー大佐の率いる「カリフォルニア義勇軍」がユタに到着する
1864	ウォルター・マレー・ギブソンがハワイで引き起こした一連の問題が解決する
1865.4	南北戦争が終結
1867	ソルトレーク・タパナクルが完成する

当時、合衆国では10年にわたる北部と南部との間の激しい対立があった。1861年にエーブラハム・リンカーンが合衆国大統領に選ばれると、南部の幾つかの州が連邦から脱退した。1861年4月12日、南北戦争の始まりを告げる最初の砲音が、サウスカロライナ州のフォートサムターに響いた。血肉が相争うこの戦いは4年続き、「古きよき南部」は壊滅し、60万2,000人の命が犠牲となった。この時代、ユタの末日聖徒は比較的に平安な発展の時期を過ごした。

末日聖徒と南北戦争

南北戦争が勃発したとき、多くの末日聖徒は「戦争に関する啓示と預言」を思い起こした。それは預言者ジョセフ・スミスが1832年12月25日に授けられたものである。

「まことに、主は、間もなく起こる戦争に関してこのように言う。それはサウスカロライナの反乱で始まり、ついには多くの人の死と苦悩に終わるであろう。……

見よ、南部諸州は北部諸州に反対して分裂する。」(教義と聖約87：1, 3) 1843年に預言者は、サウスカロライナで始まる流血は「恐らく奴隷問題によって起こるであろう」と宣言していた(教義と聖約130：13)。多くの宣教師がこの預言を引き合いに出し、主の言葉が文字どおりに成就したのを目の当たりにして、心に幾らか喜びを感じた。

しかし、戦いが深刻化するにつれ、この内乱に対する聖徒たちの感情は複雑なものになっていった。末日聖徒は「諸州」で起きる流血と惨状を、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殺害、また神の戒めへの不従順、ミズーリやイリノイにおいて自分たちに加えられた不法行為への裁きと考えていた。教会員はジョセフ・スミスの指導に従い、合衆国憲法を心から擁護していた。ジョン・テラーは当時の多くの末日聖徒の思いを次のように述べている。

「わたしたちは何の正当な理由もなく、町から町、州から州へと追い立てられた。わたしたちは文明の辺境と言われた地を追われ、荒れ野の中に家を作ることを強いられた。……

わたしたちは北軍に加わって、南部と戦うべきなのだろうか。そうではない……。なぜだろうか。すでに明らかのように、彼らは自らその結果を招いたのであり、わたしたちには関係のない問題である。……わたしたちには、北部も南部も、東部も西部もない。厳格に、また積極的に合衆国憲法に従うだけである。」¹

戦いが始まって約1年経過した時期にヤング大管長は、聖徒たちが西部の地にとどまることができたのは非常に幸運であったとして、次のように述べている。「わたしたちは今はこうして遠く離れた静かな山々と盆地に囲まれた平和な地に住み心穏やかにしていますが、もし迫害を受けていなかったら、今ごろは、国を荒廃させてい

時満ちる時代の教会歴史

る戦いと流血の渦中に巻き込まれていたことでしょう。今日こうして兄弟たちが穏やかに席に着いている姿を見ているのですが、それもかなわず、彼らの多くが戦場の最前線に出ていたことでしょう。現在わたしたちが安全に守られているのは、神の祝福によるものであることが分かります。わたしたちを滅ぼそうとした敵は今苦しめられていますが、わたしたちは大いなる祝福を受け、豊かに恵みと喜びを授けられているのです。」²

教会の指導者が南部連合軍への支持を考慮することはなかった。したがってエーブラハム・リンカーン大統領から、大陸横断通信線と輸送ルート守備のための兵員提供の要請を受けると、教会はそれに熱心にこたえた。また聖徒たちは、合衆国議会からユタ準州に賦課された年間2万6,982ドルの戦時負担金の納付にも同意した。教会の指導者たちは再三にわたり北部への忠誠を貫き、北部諸州からの脱退を考慮する州が幾つかある中で、ユタは連邦軍に加入しようとした。

ユタと教会は南部諸州の連邦脱退の影響をすぐさま感じた。南部のジョージア州出身のアルフレッド・カミング知事が、連邦政府から任命された知事職を自ら辞任すべきだと考えたのである。彼はおとなしくユタを去り、南部へ戻った。やはり南部のバージニア州出身のアルバート・シドニー・ジョンストン将軍もその職を辞任し、南部諸州軍に加わった。数か月後には、ユタの駐留軍も撤退した。1861年3月、南部諸州が脱退した連邦政府は、ユタ準州の西部地域をもってネバダ準州を組織した。そして1862年と1866年にネバダ準州はその境界を広げられ、1864年には州に昇格した。

ユタ準州から連邦政府軍が撤退したことにより、大陸横断郵便輸送網と電信網をインディアンからの攻撃から守る必要が生じてきた。インディアンたちは以前にも増して攻撃的になっていると伝えられ、ワイオミングのフォートブリッジャーとフォートラミー間の郵便輸送中継所を幾つか破壊していた。1862年の春、連邦政府の当局がブリガム・ヤング（彼はすでに準州知事ではなかったにもかかわらず）に接触を図り、政府軍が到着するまでの約3か月間、東西を結ぶ道路の守備のために、騎兵隊を組織するように要請した。すぐに120名の男性が集められ、出発の準備が整った。皮肉なことにその指揮官となったのは、ユタ民兵隊のロト・スミス大尉であった。彼はそのわずか4年前には、連邦政府軍の進軍を遅らせるために働いた人物である。スミス大尉は兵士たちの間に汚れた言葉遣いや無秩序な行為がないようにし、インディアンと友好的かつ平和的な関係を築くようにとブリガム・ヤングから求められた。この民兵たちは立派にその責任を果たした。実際の戦闘はなく、数名のインディアンを追跡した程度であった。そして、その働きは合衆国政府からの称賛を受けた。³ 南北戦争中に末日聖徒の組織された部隊が直接的軍事行動に参加したのは、これが最初で最後であった。

1862年にユタ準州民は、州昇格の請願を再び試みた。聖徒たちはデゼレト州という州名で申請し、州憲法の草案も作り、ブリガム・ヤングを知事とする州政府のおもな顔ぶれの仮選出まで行った。しかし彼らの申請はまた却下された。一番の原因は多妻婚の問題であり、与党の共和党がそれに断固として反対していたのである。

共和党選出の大統領エーブラハム・リンカーンは、末日聖徒を直接的な対象とする1862年の重婚禁止モリル法に署名していたが、施行の段階まで事を進めることは

南北戦争の時代

していなかった。彼はモルモンの問題に関しては偏見のない公平な見方をしていたが、南部諸州の反乱にどう対応するかという問題により関心が向いていた。ブリガム・ヤングは、モルモンに関してリンカーンがどのような意向を持っているかを確認するために、『デゼレトニュース』(Deseret News)の編集補佐T・B・H・ステンハウスをワシントンに派遣した。大統領は彼に次のように語った。「ステンハウスさん、わたしが子供でイリノイの農場にいたころ、そこには取り除かなければならない木がたくさんありました。倒れた丸太と出くわすこともよくありました。割るには固すぎ、燃やすには湿りすぎ、動かすには重すぎる。それでわたしたちはそれをよけて耕したものです。わたしはモルモンに対して、それと同じようにしようと思っています。戻ったらブリガム・ヤングに伝えてください。彼がわたしのじゃまをしないなら、わたしも彼のじゃまをするつもりはないと。」⁴ 南北戦争が終結するまでの残りの期間を通して、信教の自由を支持するリンカーン大統領の態度は、聖徒たちの敬意を得た。

通信手段の発達

悪意を持つ政治家たちは多くの人々にモルモンに対して偏見を抱かせたが、その一方でユタを訪れる著名な人々が自分の目で確かめて感銘を受け、それを公にするということもあった。1855年にフランスの植物学者ジュール・レミーがソルトレーク・シティーに来て1か月間滞在した。レミーは1860年に、ヨーロッパで自分の見解を発表した。レミーはその中で、聖徒たちを勤勉で宗教心が強いと評し、多くのヨーロッパ人が教会に対して持っていた否定的なイメージの幾つかを変えた。アメリカの非常に有名なジャーナリストであった『ニューヨークトリビュン』(New York Tribune)紙編集主幹ホーレス・グリーリーも1859年にユタを訪れ、ブリガム・ヤングとモルモンについて公正な内容の記事を書いた。そして当時最も有益な論評の一つを著したのが、世界的に有名な探検家リチャード・バートンであった。彼は1860年にユタ州を訪れ、後にモルモンについて『聖徒の町』(The City of the Saints)という洞察に満ちた本を著し、それは多くの人々に読まれた。

外の世界との通信手段もさらに発展を見せた。その初めが1860年4月に開通したポニーエクスプレスであった。80人の大胆不敵で軽量の騎手がミズーリ州のセントジョセフからカリフォルニア州のサクラメントまで2,000マイル(約3,200キロ)近くもある道のりを、中継しながら10日で郵便物を運んだのである。この伝説的な偉業を成し遂げるために、騎手たちは320の中継地点で10マイル(約16キロ)ごとに馬を変えながら疾走した。ポニーエクスプレスのルートはユタ準州内を通過しており、1年半というその存続期間に、危険ではあったが夢の多いこの仕事に多くのモルモンの男性たちも参加した。

1861年10月には、大陸横断通信線がソルトレーク・シティーで接続され、ポニーエクスプレスが廃止される大きな理由となった。これによって様々なメッセージが電文として、遅れることなく合衆国内の中継局に送信されることになった。電信線の全面開通は、1851年の「逃亡役人」がまき散らした偽りの情報や1857年のブキャナン大統領によるユタ遠征を企てるような問題に終止符を打った。

ブリガム・ヤング大管長は、開通した大陸横断電信線で最初の電文を送信する特



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

大陸横断通信線

時満ちる時代の教会歴史

権を与えられた。預言者はオハイオ州クリーブランドのパシフィック・テレグラフ社のJ・H・ウェード社長にあてて次のような祝辞を打電した。「ユタは孤立した立場を取ることなく、この幸いな国の憲法と法律をしっかりと守り、このような有益な事業に心から関心を抱いております。」⁵

大陸横断電信線がソルトレーク・シティーまで通じるようになると、プリガム・ヤングはすぐに、全入植地を結ぶローカル電信線敷設構想を練り始めた。そしてソルトレーク・シティーに電信技術を教育する学校を開設した。電線、バッテリー、絶縁体、送受信器、その他の機器類の発注もなされたが、南北戦争の影響で実際には1866年になるまで調達することができなかった。1867年に500マイル（約800キロ）もの電信線が開通した。その後何年にもわたって電信線はアイダホ南部、アリゾナ北部を含めモルモンの入植地のほとんどを結ぶまでに延びていった。1880年までに、1,000マイル（約1,600キロ）以上の敷設が行われた。

再度の政府軍の駐留

リンカーン大統領が当初ユタ準州に対して行った人事の幾つかは望ましい結果を生じなかった。準州知事に任命されたインディアナ州出身のジョン・W・ドーソンがユタにとどまったのはわずか1か月間であった。彼は愚かにもユタに着任して間もなく、国家に対する反逆罪の嫌疑を晴らすという名目でモルモンに税を賦課するという自分の意向を州議会で話した。その数日後、彼はソルトレーク・シティーに住むある女性に理不尽な申し出をした。そしてそのことが露見すると、面目を失って町を後にした。彼はマウンテンデル郵便中継所で見つけたが、そこで酒に酔った多くの無法者たちから暴力を受け、その無法者たちは後に裁判にかけられた。

約2か月後にリンカーン大統領は、やはりインディアナ州出身のスティーブン・A・ハーディングをドーソンに代えて、ユタ準州知事に任命した。ハーディングはニューヨーク州マンチェスターでジョセフ・スミスの家族を知っていた。ユタに着任すると、彼は聖徒たちに好意的であるふりをした。しかし間もなく彼は教会とその教えを軽蔑し、聖徒たちは国家に対して忠誠を尽くしていないと告発した。

ハーディングの告発はワシントンの軍当局に、モルモンの志願兵の兵役期間を更新せず、その代わりにパトリック・エドワード・コナー大佐が指揮する「カリフォルニア義勇軍」をユタに派遣する口実を与えた。教会の指導者と会員たちは、郵便輸送ルートと電信線網の守備、インディアンの取り静めなどの任務を喜んで果たしてきただけに、当然のことながら外部からの軍隊の駐留を快く思わなかった。コナーが、モルモンは連邦政府に対して忠実でなく、自分の最重要任務はモルモンの徹底的監視であると強く信じていたことは、事態をさらに悪化させた。聖徒たちは、コナーが700名の兵士を、ジョンストン軍が撤退して間もない駐留地に配備することを望んでいたが、彼はソルトレーク・シティーのすぐ東側の山麓地を選び、故スティーブン・A・ダグラスにちなんでそこをキャンプダグラスと名付けた。

コナー指揮下の政府軍は1862年10月にキャンプダグラスに入り、南北戦争が終わるまでそこに駐留した。政府軍兵士たちは、ユタの地域住民にとって決して好ましい存在ではなかった。カリフォルニア出身の兵士たち自身も、実戦に参加するのが望みで、ユタに駐留するのは楽しいことではなかった。教会員と軍の間では非難の

南北戦争の時代



パトリック・エドワード・コナー（1820 - 1891年）。退役後ユタにとどまり、死に至るまで探鉱の仕事を続けた。しかし、その仕事ではまったく成功を収めることができず、彼が死んだときに持っていた財産はわずか5,000ドル程度だった。

応酬がなされた。聖徒たちは軍を有害な存在と考え、自分たちが山岳地帯の中に築いた大切な社会の道徳を低下させる原因と見なしていた。ユタに駐留している間に将軍に昇格した指揮官コナーは、兵士たちをよく統率した。彼は交易ルートを守り、1863年1月の有名なベア川の戦いではユタ北部とアイダホ南部から、インディアンの襲撃の脅威を取り除いた。その結果聖徒たちは、これらの魅力的な地域への入植を安全に行うことができたのである。コナーはまた山岳地帯において探鉱を精力的に行った。彼はその働きのゆえに、「ユタの鉱業の父」として知られるようになった。⁶

一方、ハーディング知事は聖徒たちから甚だしい不評を受け、リンカーン大統領に対して知事更迭の請願がなされるほどであった。リンカーンはその請願を受け入れたが、ユタに住む「異邦人」たちの意を満す必要からモルモンに対して敬意を払い友好的だったジョン・F・キニー判事も解任した。ブリガム・ヤングの指導の下に、聖徒たちは1863年から1865年にかけてキニーを連邦下院議員として選出した。これによって、キニーはユタ準州史上唯一の非モルモン下院議員となった。リンカーンはユタ準州のインディアン管理官ジェームズ・デュエイン・ドティを新準州知事として指名した。彼は1863年6月に受諾し、南北戦争が終わるまでの期間、そつなく統治を行った。

モリス派事件

1862年の夏、ユタに「モリス派事件」という不幸な出来事があった。モリス派とはイギリス人改宗者ジョセフ・モリスが指導した背教者のグループである。彼らはサウスウィーバーに入植地を開いた。ソルトレーク・シティの北35マイル（約56キロ）に位置するサウスウィーバーはキングトンフォートという名で知られていた。モリスはすでに1857年から、自分は主の預言者、聖見者、啓示者であると称し、1860年には何人かの信奉者を得ていた。その中にはサウスウィーバー地区の監督と会員たちが含まれていた。1861年2月にヤング大管長は事実関係の調査のために、使徒のジョン・テラーとウィルフォード・ウッドラフをサウスウィーバーに派遣した。二人はそのワードの16名の会員を破門とした。その中にはブリガム・ヤングを支持することを拒否しジョセフ・モリスが預言者であると主張する監督も含まれていた。モリス派の人々は、それぞれの持ち物を共有財産としてささげ、モリスの「示現」が説くキリストの差し迫った来臨を待望していた。

1862年の早いころに、再臨に関して一連の間違った預言が行われた後に、モリス派の信徒の何人かが迷いから覚め、前にささげた財産を返還してもらったうえで、脱退しようとした。逃げようとした3人がモリスによって監禁され、彼らの妻たちが司法当局に訴えて助けを求めた。裁判所長のキニーが5月22日に、監禁された3人の解放と、モリスとその側近の逮捕を命じる礼状を出した。モリスがそれに従うことを拒み、自分の示現の発表を続けるに及んで、キニーは知事代理フランク・フラーに令状の強制執行のために武装保安隊として民兵を出動させるように促した。

準州保安官筆頭代理ロバート・T・バートンは6月13日の早朝、250名の兵を率いて、キングトンフォートの南にあったモリス派の根城に近づいた。彼らはまずモリスに降伏し令状に従うよう求めた。

モリスとそのグループはとりでの中の屋根のない休息所に集いモリスに啓示が授

時満ちる時代の教会歴史

ユタ州歴史協会の厚意により掲載



ロバート・テラー・バートン（1821 - 1907）は、ノーブー軍楽隊の隊員であり、宣教師、ユタにおけるノーブー隊隊員、準州保安官代理、デゼルト大学評議員、ユタ州議会議員などの職務を果たした。彼はソルトレーク・シティー第15ワードの監督の職も受け、1875年には教会の管理監督会の副監督として召された。

けられるのを待っていた。事態が一向に変わらないのにしびれを切らして、バートンがとりでに当たらないようにして大砲で警砲を2発撃つように命じた。ところがその2発目の砲弾がとりで正面の畑に落ち、モリス派の人々が集っていた休息所の中に跳飛した。二人の女性が死亡し、一人の若い女性が重傷を負った。こうして起きた戦いは、3日にわたる包囲戦となった。

3日目に、とりでの中から休戦を求める白旗が掲げられ、戦いがやんだ。無条件降伏を求めた後に、バートンと30名の兵がとりでの中に入った。このときモリスは自分に従う人々にもう一度話をする機会を与えてくれるように求めた。しかし彼は別れのあいさつをするどころか、「わたしと、わたしの神に帰依するすべての者よ、生けるときも、死んだ後も、わたしに従え」と叫んだのであった。そのとき、モリスを疑わない者たちが、すでに引き渡し済みで積み上げられていた銃を取り戻そうと殺到した。⁷ 激しい銃撃戦が交わされ、ジョセフ・モリスと彼の右腕のジョン・バンクスが命を落とした。結局、3日間の衝突の中でモリス派から10名、ユタ武装保安隊から2名の死者が出た。モリス派の90名がソルトレーク・シティーへ連行され、2名の保安隊員殺害と公務執行妨害の罪状で裁判にかけられた。彼らのうち7名が有罪判決を受けたが、ハーディング知事によって特赦となった。そして自ら希望したモリス派の残りの者たちの多くはコナーが指揮する兵の護衛を受けて、アイダホ準州のソーダスプリングへ移った。この不幸な事件に教会は直接関与しなかったが、結果的にこれによって東部では教会の評判が悪くなった。

ハワイにおける問題

この時代に教会の指導者を憂慮させたもう一人の人物がいる。ウォルター・ムレー・ギブソンという^{ようへい}傭兵の経歴を持つ男である。ギブソンはユタ戦争の時代にワシントンで教会の主張を弁護する立場に回り、後に聖徒たちをもっとよく理解する目的でソルトレーク・シティーへ来た。彼は多くの教会指導者と知り合いになり、旧タバナクルで大勢の聴衆を前に自分の旅の経験について話した経験がある。1860年1月15日に娘のタルラとともにヒーバー・C・キンボールからバプテスマを受け、ブリガム・ヤングから確認の儀式を受けた。ギブソンが聖徒たちを東インド諸島に住まわせてはどうかという提案をしたときヤング大管長はそれを受け入れなかったが、彼を合衆国東部への伝道に召した。ギブソンはその召しを6か月だけ果たすとニューヨークの聖徒たちに、自分は今すぐソルトレーク・シティーに行く必要があると話して信用させた。ニューヨークの聖徒たちは彼がソルトレーク・シティーに戻るための旅費の拠出要請に惜しみなくこたえた。

1860年11月、ギブソンはブリガム・ヤング大管長から太平洋地域で伝道活動を行うよう召された。ヤング大管長は彼に、全力を尽くすなら自分が思う以上の良い結果を得ることができると話した。

1861年の夏、ハワイに到着したギブソンは自分に与えられた権限を越えた行いをし、ハワイの古くからの慣習と福音の教えを混交させてハワイの聖徒たちの支持を得た。ユタ戦争の間は宣教師たちがユタへ呼び戻されていたために、ギブソンは聖徒たちを思うままに動かすことができた。彼は自分自身を「海の島々と、ハワイ諸島における末日聖徒教会の最高管理者である」と宣言した。ギブソンはハワイの会

南北戦争の時代

員たちに全財産を自分にささげるように説得した。また十二使徒を任命し、その一人一人から見返りとして150ドルを徴収した。大祭司，七十人，長老などのほかの職についても，彼はそれなりの金銭を求めた。さらに大監督，小監督という職まで設けた。⁸ 彼は教会の儀式を物々しく，仰々しいものに変え，長い式服を着，会員たちには自分に対して頭を下げたり，平伏したりするように求めることさえした。ギブソンがねらっていたのは，軍隊を組織し，ハワイ諸島全土を一つの帝国として統一し，自分自身が王になることであった。

そしてついに1864年，事態を憂慮したハワイ人聖徒たちがソルトレーク・シティーに状況を報告する手紙を書き送った。ヤング大管長は十二使徒定員会のエズラ・T・ベンソンとロレンゾ・スノー，また過去にハワイで宣教師として働いた経験のあるジョセフ・F・スミス，アルマ・スミス，ウィリアム・クラフをハワイに派遣し，事の処理に当たらせることにした。彼らはギブソンが本拠地としていたラナイ島に上陸しようとしたが，そのときそこの港は強風が吹き，波が荒れ狂っていた。そして彼らが乗っていたあまり大きいとはいえない船は転覆してしまった。ロレンゾ・スノーを除く全員が，海岸からその事故を目撃したハワイ人たちによって無事救出された。最後に，気絶したロレンゾの体が転覆した船の下で発見された。そこにいただれの目にもロレンゾは死んでいるとしか映らなかった。ハワイ人たちは無駄なことだと断言したが，兄弟たちは彼の体を自分たちのひざの上に乗せ，信仰をもって祈り，癒しの儀式を施した。彼らはロレンゾの体をたるの上に乗せて揺らしたり，胸を押したり，口移しの呼吸を試みたりして，何とか息を吹き返させようと努力した。そして事故から1時間以上たってようやく彼は，かすかに息を吹き返したのである。⁹

ギブソンの居所を捜し当てた長老たちは，状況が聞いていたよりもなお悪いことを知った。彼らはギブソンに会い，彼が教会の名によって集めたすべての財産，金銭を渡すように命じた。しかしギブソンがこれを拒んだため，兄弟たちは彼を破門処分とした。数週間後，ハワイの聖徒たちの多くは自分たちに遣わされた教会の指導者に従うようになった。この指導者たちがハワイの聖徒たちの信頼を取り戻すのに役立った一つの出来事があった。ギブソンはある岩場を聖地と定め，そこを歩く者は死に撃たれると警告していた。ところが長老たちのうちの二人がそこを歩いたのであった。使徒たちは教会の秩序を元に戻すとユタへ戻り，ジョセフ・F・スミスとほかの二人の同僚に伝道の責任を託してハワイにとどまらせた。スミス長老はライエで農園を取得し，開発を進めた。そこは伝道本部と多くのハワイの聖徒が住む場所になった。20世紀には，ここにハワイ神殿，ブリガム・ヤング大学ハワイ校，ポリネシア文化センターが建設された。

伝道活動と移民

アメリカに荒れ狂う南北戦争，コナーが指揮する軍隊の駐留，モリス派事件，ウォルター・ムレー・ギブソン事件など様々な問題があったが，教会の指導者の最大の関心はシオンの発展，すなわちより多くの人々を教会に改宗させ，できるかぎり多くの会員をユタに集合させることであった。

国民の多くが大きな悲しみを経験していたこの時代に，50ほどの新しい入植地が



ウィリアム・ウォレス・クラフ（1832 - 1915年）は，モーガン郡，サミット郡，ワサッチ郡の管理監督として召された。ブリガム・ヤング大管長が教会の神権組織の改組の一環として，管理監督は教会に一人とすると発表した1877年に解任された。このとき管理監督に召されたのはエドワード・ハンターであった。ウィリアムはスカンジナビア伝道部を管理するように召され，またサミットステーク会長としての召しも果たした。

時満ちる時代の教会歴史

開かれた。そのうちの一つがユタ南部のセントジョージであった。セントジョージは南部からの物資の調達ができなくなったときに始まった「綿花栽培振興策」の対象地の一つとなった。アリゾナ北部にはパイプスプリングス、そしてユタ中部にはモンロー、サリナ、リッチフィールド、ユタとアイダホのベアレック周辺地域にはレイクタウン、パリス、モントピーリアが建設された。その多くが農業を基盤とする、古くからの入植地も発展を遂げていた。1860年代の初期に、コロラド、モンタナ、アイダホ、ネバダ各州で鉱業が大きく発展すると、小麦粉、穀物、その他の農産物を積んだユタの何百台もの幌馬車が鉱山の現場に販売に出かけ、聖徒たちの経済を大いに潤した。これはユタ戦争と南部への移動によって痛めつけられていた人々にとってすばらしい祝福となったのである。

伝道活動は南北戦争の間に再び強化された。北アメリカでは実質的に伝道活動が行われていなかったこの時期に、教会はヨーロッパ中で成長を遂げていた。大西洋横断電信網の発展は、ヨーロッパの聖徒たちとの通信を大いに助けた。1860年に大管長会は、十二使徒定員会会員のアマサ・M・ライマン、チャールズ・C・リッチ、ジョージ・Q・キャンノンを、イギリス伝道部とヨーロッパ伝道部を管理させるために派遣した。この二つの伝道部はどちらもイギリスのリバプールに伝道本部を置いていた。この3人の使徒たちは、ライマン長老とリッチ長老がユタへ戻った1862年5月14日まで、ヨーロッパ伝道部を管理した。キャンノン長老はワシントンへ行き、少しの間ユタの州昇格のための働きをし、その後再びイギリスへ渡って、1864年にユタへ戻るまでイギリスで伝道部の管理の責任を果たした。

これらの使徒たちは、アメリカからの長老たちを派遣できなかった地域ではイギリスとスカンジナビア諸国の地元出身の宣教師を用いて、英国諸島とヨーロッパ大陸の両方におけるイスラエルの集合を再び活性化した。ユタ戦争の間とその後しばらくの間伝道活動は減退していたが、ここに至って再び改宗者の数が大幅に増加した。イギリスとスカンジナビア諸国には特に豊かな収穫があった。教会が拠出する費用を抑えるために、プリガム・ヤングは宣教師たちに「財布も袋も持たず」に旅をし、宿泊と食事は喜んで助力してくれる教会員たちの世話を受けるようにと指示した。また多くの宣教師は妻子を残して伝道に出ていたために、家族が自分たちだけの力で生活できなくなった場合には、地元の神権指導者に援助を頼むようになっていた。

教会の指導者は、ヨーロッパの聖徒をシオンへ連れて来るための方法について、新しく、よい方法がないかと常に注意していた。1860年の秋にジョン・W・ヤングが様々な産物を積んだ幌馬車を雄牛に引かせてまず東部へ行き、移住者たちの必要を賄うためにそれらのものを売却した。その後彼は、雄牛に引かせた幌馬車で移住者をミズーリ川からソルトレーク盆地まで連れて来たのであった。この方法は大きな成功を収め、彼は10月の総大会でそのやり方について話す機会を与えられた。

それ以来、毎年行われる移住のための物資を積んで牛に牽引された幌馬車が4月にユタを出発し、夏か初秋には移民とともに戻って来るようになった。若い男性たちがこの「教会の幌馬車隊」の御者の責任を果たす宣教師として召された。1861年から1868年の間に、教会は1万6,000人以上の聖徒をヨーロッパからユタへ運んだが、聖徒たちが自発的にささげた労力、家畜、補給物資によって、それにかかる費用を抑



ジョージ・クエール・キャンノン（1827 - 1901年）は才能豊かな人物で、教会に多大の貢献をした。宣教師、ヨーロッパ伝道部の部長、著述家、出版者、使徒として働いた。ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ロレンゾ・スノーの副管長として務めを果たした。

キャンノン長老は『モルモン書』をハワイ語に翻訳した最初の人物で、1850年にハワイ諸島の伝道の門戸を開くのに貢献した。

キャンノン長老は多妻婚実行の罪でユタ州立刑務所に投獄されていた間に、ジョセフ・スミスの生涯に関する本の大部分を著した。

南北戦争の時代

えることができた。また外部から購入する物資も少なくて済んだ。

ソルトレーク・シティーの発展

ソルトレーク・シティーの人口は、1860年現在で8,200人、1870年の段階では1万2,800人であった。1870年の人口調査では、人口の65パーセントが外国出身者であった。最も多いのは英国諸島出身者であったが、スカンジナビア出身者も多かった。当時のソルトレーク・シティーは教会員にとって入植地建設事業の中核の役割を果たしていた。

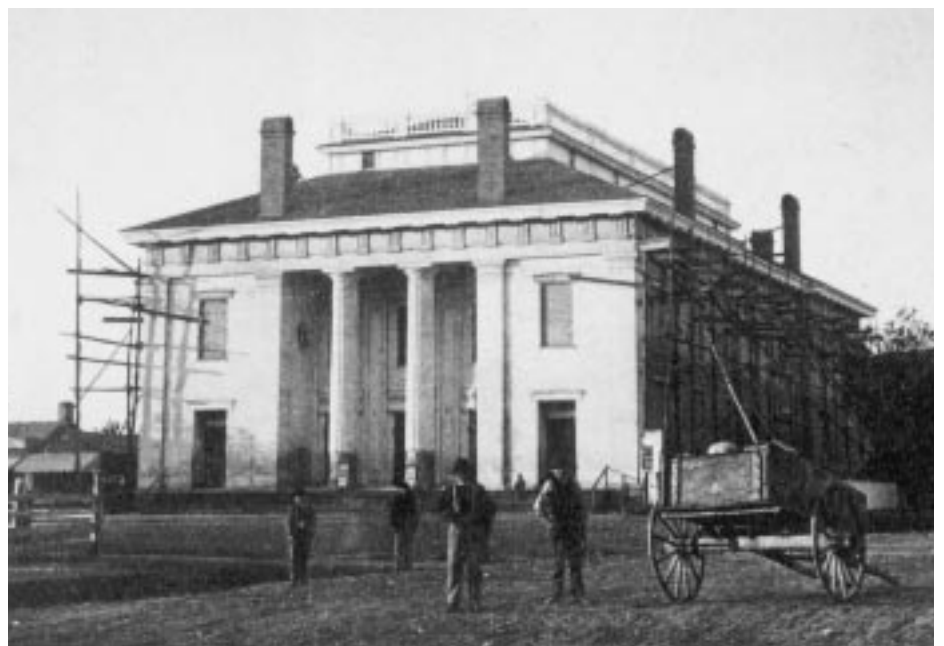
新たに到着した移民たちの労働力を活用して、公共事業の担当局は数多くの重要な建物を建設した。この発展する地域にあって、1850年代には議事堂、社交会館、エンダウメントハウス、什分の一の倉庫などが建設された。そして1860年代には、ソルトレーク劇場、市庁舎、兵器庫、ピーハイブハウス、ライオンハウス、ソルトレークタバナクルなどが建設された。1862年に建設されたソルトレーク劇場は、盆地の多くの文化、娯楽活動の中心となった。

1850年から1870年にかけて、ダニエル・H・ウエルズはソルトレーク・シティー公共事業局の局長を務めた。また彼はノーブー部隊司令官を務め、1857年からは第二副管長、1866年からはソルトレーク・シティー市長の職も務めた。

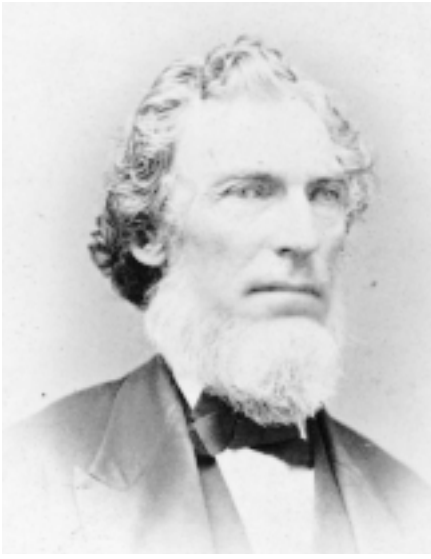
ブリガム・ヤング大管長は、適切な建物を持ち、そこに集って指導者から教えを受ければ、聖徒たちが霊的にさらに強められると信じて新しいタバナクルの建築計画を立てた。彼が構想していたのは、ドーム型の大規模な礼拝堂であった。ヤング大管長は、^{きょうりょう}橋梁建築家のヘンリー・グロー、当教会の建築士ウィリアム・H・フォルサム、そしておもに内装を担当したトルーマン・O・エンジェルの協力を得て、このユニークな建物の建築工事を監督した。このタバナクルは間口が150フィート（約46メートル）、奥行が250フィート（約76メートル）、高さが80フィート（約24メートル）あった。そしてそれは1867年10月の総大会に間に合うように完成した。タバナクル

ソルトレーク劇場。人々が宗教だけでなく、娯楽も必要としていることを感じたブリガム・ヤングは、義理の息子であるハイラム・クラウソンに、聖徒たちの必要を満たすために劇場建設の事業に着手するよう命じた。1852年から53年にかけて建設された社交場はそれまで市の娯楽センターとして重要な役割を果たしてきたが、もはや必要を十分に満たすことができなくなっていた。

1862年に完成したソルトレーク劇場は、3,000人の収容能力を備えていた。この建物は間口80フィート（約24メートル）、奥行144フィート（約44メートル）、高さ40フィート（約12.2メートル）であった。この中では酒類の提供は一切行われず、どの公演も祈りによって開幕し、祈りによって閉幕された。また出演する男性や女性は地域社会に対して良い模範を示すように望まれた。数多くの一流の俳優や芸人たちがユタを訪れ、この劇場の舞台上で上演した。ソルトレーク劇場は1929年に取り壊された。



時満ちる時代の教会歴史



ダニエル・H・ウエルズ(1814 - 1891年)はイリノイ州コマースに住んでいた。当時コマースにはミズーリ州を追われた聖徒たちがいた。教会がノーブーに本拠を置いていた時代、彼は教会員ではなかったが聖徒に対して好意的で同情的であった。1846年の夏にバプテスマを受け、開拓者の中に加わった。彼はノーブーを最後に去った教会員の一人である。

1857年、彼はブリガム・ヤング大管長の第二副管長として召され、その職を20年にわたって務めた。1866年にはソルトレーク・シティの市長に選出され、10年間在職した。1884年にはヨーロッパ伝道部を管理する責任を与えられ、その任を終えてアメリカへ戻ってからは、マントイ神殿の神殿長に任命された。



ウィリアム・H・フォルサムが設計した市長舎は、7,000ドルの費用をかけて1866年に完成した。当初、この建物は準州議会の議場として用いられた。後になって、市警察の本署が置かれた。1960年にこの建物は解体され、ユタ州議会議事堂のすぐ南側に再建された。

の建物の建設と平行して、オーストラリア人改宗者でその道の優れた技術者であったジョセフ・H・リッジスによって、巨大なパイプオルガンの制作も行われた。オルガンの材料としてうってつけの木材が300マイル(約480キロ)離れた南部ユタのパイン峡谷で見つかり、20台もの馬車で注意深くソルトレーク・シティまで運ばれた。当初、タバナクル内では音響効果に問題があったが、1870年に栈敷席を加えたことにより、8,000人の収容能力を持つこの名だたる建築物は大規模な集会に最適の場となった。

ソルトレーク神殿の工事は1860年に再開された。しかし1861年になって教会の指導者たちは、その基礎部に難点があるという結論を下した。ブリガム・ヤングは、近くの山岳地帯から切り出されたみかげ石だけの新しい基礎部は、予定されていた神殿の大重量に堪え得るものでなければならないと判断した。新しい土台は、厚さが16フィート(約5メートル)ということになった。ヤング大管長はこう宣言した。「わたしはこの神殿が福千年の間立ち続けるように、また、主に受け入れていただけるように願っている。」¹⁰ 基礎部の再工事は進行が遅く、壁体が地上部に達したのは1867年のことであった。

背教や政府軍の進攻などという問題があったにもかかわらず、通信や輸送網の改善、伝道活動の成長、入植地の増加、経済状況の好転などのすべての要素があいまって、教会に喜びをもたらした。合衆国の国民のほとんどが流血の戦いに苦しんでいた南北戦争の時代に、末日聖徒はそれとは極めて対照的な状況にあった。ユタの住民たちは平和と繁栄に浴していたのである。ユタ戦争に伴う困難な年月の後に、教会は神意によって定められた歩みを再開した。

注

1. "Ceremonies at the Bowery" *Deseret News* 「仮設集会場における儀式」『デゼレトニュース』1861年7月10日付, 152

2. *Journal of Discourses* 「説教集」10: 38 - 39 で引用

3. "Requisition for Troops" 「軍への徴用」『デゼレトニュース』1862年4月30日付, 348参照

4. プレストン・ニブレー, *Brigham Young: The Man and His Work* 『ブリガム・ヤング——人物像と業績』(Salt Lake City: Deseret News Press, 1936), 369で引用

5. ブリガム・ヤング "The Completion of the Telegraph" 「電信の完成」『デゼレトニュース』1861年10月23日付, 189

6. ガスティブ・O・ラーソン, *Outline History of Utah and the Mormons* 『ユタとモルモンの略史』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1958), 195; リチャード・D・ポール編, *Utah's History* 『ユタ史』(Provo: Brigham Young University Press, 1978), 204参照。

7. B・H・ロバーツ, *A Comprehensive History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Century One* 『末日聖徒イエス・キリスト教会概史 第1世紀』全6巻 (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1930), 5: 47で引用

8. アンドリュー・ジェンソン "Walter Murray Gibson" *Improvement Era* 「ウォルター・マレー・ギブソン」『インブループメント・エラ』1900年12月号, 87

9. ジョセフ・フィールディング・スミス編, *Life of Joseph F. Smith* 『ジョセフ・F・スミスの生涯』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1969), 215 - 216参照

10. ウィルフォード・ウッドラフ, 歴史記録者による個人の歴史 - 1858年, 1862年8月22日分記載, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ

